

「教育学科」30年の歩み

山本冬彦

はじめに

関西大学文学部教育学科は1967年に創設されて以来、本年（1997年）で創立30周年を迎えた。文学部で一番新しい学科として、創設当時から、いろいろな新しい試みを教育や研究の各部門で行い、多彩な人材を卒業生として送り出し、さまざまな研究成果を世に問うてきた。当初からフレッシュな学風を誇った学科であったが、30年という歴史を刻むことになったのである。

この30年の歳月の間、教育学科を取りまく状況も大きく変化している。また戦後の高度成長のなかで押し進められた教育政策により、教育荒廃が、学校、家庭、地域、職場など、教育の営みが行われている現場で進み、その克服の課題も、より切実なものになっている。その解決のために教育学科の果たす役割が改めて問われている。

こうしたなかで、教育学科が30周年を迎えることになったわけだが、この小論では、これまでの教育学科の30年の歩みを簡単に振り返ることによって、これらからの学科の進むべき方向を考えるための一助に供したい。なお、本稿は山本個人の立場で執筆されたものであって、学科としての見解ではないことを予めお断りしておく。

1 学科創設期(1967年から1977年まで)

— 学生と教育との共同研究をめざして —

(1) 開設の理念とその内実化

関西大学文学部教育学科は、1967年4月から社会学部設置にともない、文学部にあった新聞学科が同学部に発展的解消されるのを受け、同学科に替わる新学科として設置された。教育学科には、教育学専修と心理学専修のコースが置かれることになったが、これは、教育学と心理学の研究・教育が並列的に行われるのではなく、教育学の立場と心理学の立場のそれぞれから、教育という人間の営みを対象として研究していくという前提のもとで組立られたものであった。

また、教育学科は直接、教員養成を専門とする学科やコースとして作られたものでもなかった。教育学科はあくまで、教育学と心理学とを研究する学科であり、教員免許取得を卒業の要件として学生に課しているものでもない。しかし、同時に、設立当時の教員不足という社会的状況のなかで、教員養成を質、量ともに高めなければならないという社会的要請に応えるためにも、教育学や心理学の専門課程を修めた教員の養成が期待されていた。

また、当時は、戦後のベビーブームのなかで生まれた世代が大学入学年齢を迎え、学部学科の増設が推進されていた時期でもあった。さらに関西大学の社会学部の設置にも見られるように、人間そのものを対象にした学問や科学の研究・教育をめざした学部、学科が全国的につくられた時代でもあり、そうしたことも教育学科創設が認められた背景にあったと思われる。

設立当初のカリキュラムは、先に述べた学科設立の理念に沿い、1年次では、教育学・心理学文献講読（後に教育学・心理学基礎演習となる）、2年次では、教育学概論、教育心理学概論、教育社会学、心理学概論が共通の必修科目とされ、3年次以降の専修選択の如何に関わらず、教育学と心理学の基礎科目の履修が学生に義務づけられた。

また同時に設置された第2部の課程でも、基本的に1部と同じ科目が開講された。とくに2部での心理学の専門のコースを設置する大学は少なく、教育学科の一つの特色となった。

さらに、関西大学の教職課程や社会教育主事課程についても、教育学科は開設以来、多くの科目について講義担当者の推薦母体となり、学科の専門的知見に基づきながら、その運営に積極的に関与してきた。こうした努力は、後に、教職課程研究センターの開設（1986年度から）というかたちで結実していくことになった。

また1970年代前半から、大学構内での差別落書き事件が頻発するなか、1974年に行われた当時の広瀬学長の自己批判を受けて、一般教育課程での部落解放論の開講、教職課程での部落解放教育の研究の4単位必修化、部落問題研究室の設置が決められ、その後の関西大学での部落解放教育、人権教育の取り組みがはじまったが、このプロセスのなかで、教育学科は、さまざまなかたちで尽力することになった。

(2) 共同学習、共同討議

さて、教育学科の創設時の理念のもう一つの柱は、共同学習、共同討議であった。教員と学生との関係は、教え—教えられるという単純な上下関係ではなく、共同学習者、共同研究者として位置づけられ、課外の共同学習活動なども盛んに行われた。この学風は、とくに1969年の大学紛争での問題提起を受けとめるかたちで、さらに内実化された。たとえば教育学科の設立と同時に創設された関西大学教育学会は、年2

回の研究集会を開催していたが、1971年ごろから、その企画、運営に絶えず学生会員が参加していた。また、教育学専修の3、4年次生に配当された教育学演習では、実際上は教員の複数担当制が行われ、共同学習の原則をより内実化させることになった。また心理学の「自閉症児研究グループ」をはじめ、学科内の学生が自主的に組織したサブゼミ、学術サークルが多数存在し、新3年次生を対象にした、専修分けのガイダンスのための合同ゼミ合宿なども毎年行われた。さらに卒論の試問に代えて実施された公開の卒論発表会にも下級生の学生をふくめ、大勢の学生が参加し、共同学習の内実が深められていった。こうした経過のなかで、1部2部間の学生の交流なども行われた。

このような学科創設期にあって、当時の学生の学習姿勢も、学科の設立理念や、学風の実現によく応えるものであったといえる。1974年には教育学科の自治組織である教育学科クラス・ゼミ連絡会議が、同年に起きた「心理・教育実験室強制移転問題」を機に結成された。卒業後の学生は、教職や教育関係の職場に就く者が多く、また、鑑別所の技官、カウンセラーなどの心理専門職へも優秀な人材を輩出していった。

また先に述べた関西大学教育学会は、学科の設立と同時に学内学会として設立され、学科創設を記念するシンポジウムをはじめ、さまざまな活動をはじめた。そして、学会の学術刊行物として、『教育科学セミナー』を毎年刊行し、学科教員や卒業生などの原著論文、卒論などの紹介、関連文献の書評などを掲載し、現在に至っている。

教育学科は、1970年に完成年度を迎えたが、1、2部併せて300名余りの学生を擁し、専任教員12名の陣容となった。1975年度からは、大学院の修士課程も新設され、教育思想専修、教育計画専修、教育心理学専修、心理学専修の4コースが設置され、研究者の養成もスタートす

ることになった。なお各コースの1学年の学生定員はそれぞれ3名、全体で計12名であった。

2 学科の発展期（1977年から1986年まで）

(1) 部落問題についての共同研究

教育学科の次の10年間は、先の10年間のさまざまな蓄積の上で、時代の変化にも対応しながら、学科がさらに発展していった時期だったといえる。その一つの成果が、部落問題に関わる学科教員の共同研究である。1965年に出された同和対策審議会の答申では、「同和問題は国民的課題である」ことが明記されていたが、こうした課題が、教育学や心理学の研究のなかで具体化され、さまざまな研究者によって成果が上げられるまでには、まだまだ時間が必要とされるような状況であったが、教育学科では、被差別の立場に置かれていた子どもたち、とくに被差別部落の子どもたちの「低学力」の克服の課題を、学科として取り組むことになった。この共同研究は文部省科研費の助成を受けて実施され、その成果は1980年3月に刊行された『教育科学セミナー特別号』『「同和」地区における児童の低学力克服に関する教育方法論的研究』にまとめられた。また、教育学科の教員は、その後も、部落問題研究室や、それがその後改組された人権問題研究室の研究員としての活動などを通して、関西大学の人権教育、人権問題研究の確立の一翼を担うことになった。また、教育学科の多くの卒業生が、大学での学んだことを、それぞれの教育現場でさらに実践的に深めていった。

(2) 留学生の入学、国際交流の進化

この時期の特筆すべきもう一つの特徴は、海外からの学生の受け入れが始まるなかで、留学生と学科教員、学生とのさまざまな交流が生まれてきたことである。また、全学的な国際交流

センターの設立や、学生に対する留学制度の設置、また円高の進展に伴う海外留学、旅行ブームなどの影響も受け、学生の間でも、海外での生活を経験する者も増加したじめた。また従来からの専任教員の在外研究制度と相まって、その後、現在にいたるまで、国際的な視野や交流のなかで、教育学や心理学の研究、教育を進めていく体制が、徐々に進捗してきた。

1985年の6月に開催された関西大学教育学会春期大会では、国際青年年にちなみ、教育学科に所属している海外の留学生や関西の他大学にいる留学生と（韓国、台湾、中国、タイ、ガーナ、ナイジェリア、アフガニスタン、ブラジルなど）教育学科学生とのシンポジウムと討論会、交流会が行われ、留学生の果敢な発言に大いに刺激を受けた。

(3) 共同学習、共同討議の継続

またそれまでから行われていた共同学習、共同討議の学风も引き継がれ、上位年次と下位年次の学生、教育学専修と心理学専修の学生の交流なども活発で、1、2年次生の学園祭への共同参加、学生の自主的なサブゼミの組織・運営、障害児の介護やセラピーなどが代々の学生に引き継がれ行われていた。2部の学生も同様に学生同士の関係が学年を超えてつくられ、新入生歓迎会、教育学専修・心理学専修学生合同の夏の合宿などが、学生の手で企画・運営され、今日に至っている。

1986年11月24日には、教育学科20周年の記念するシンポジウムが開催され、また、教育学科同窓会も結成された。

3 学科の転換期（1987年から1997年まで）

(1) 鈴木祥蔵教授の停年退職とドクターコースの設置

1989年3月に学科の創設者の一人である鈴木

祥蔵教授が停年退職された。もう一人の創設者といえる川口勇教授は1974年にすでに他大学に転任されていたので、学科は、創設者のリードから離れることになり、大きな時代の節目を迎えることになった。なお、1989年4月からは、学科の卒業生2名がはじめて専任教員（教育学専修、心理学専修それぞれ1名）として着任した。

1991年4月からは、念願の大学院ドクターコース（博士課程後期課程）が開設され、教育思想専修、教育計画専修、教育心理学専修（1）（発達・認知）教育心理学専修（2）人格・適応）の各コースにそれぞれ1名、計4名の学生定員でスタートした。

また1992年9月には、第一学舎4号館（ゼミ棟）が竣工し、そのなかに心理第3実験室がつくられた。これにより、従来からあった心理・教育実験室は廃止され、心理第2実験室内に教育調査室が新たに設けられた。学会事務局を含めた教室事務は研究棟の合同研究室に移された。そして、この年の10月24日、関西教育学会第44回大会が新装なった4号館を中心にして開催され、分科会、課題別研究会、学校5日制をめぐる公開シンポジウム、懇親会などが催された。

(2) 学科をめぐる内外の状況の変化と大学改革
ところで、最近のこの10年間の時期には、それまでの教育を担ってきたさまざまな制度、子育ての常識や大人と子どもの関係などが、現実の子どもや青少年の育ちのなかで、大きく問い直されることになってきた。中学校などでの子どもの荒れや校内暴力、さらに陰湿ないじめや不登校の発生が、一種の「制度的疲労」として、理論レベルだけではなく、現場サイドからも議論されはじめた。このことの当否は別としても、たとえば、不登校の子どもに必ずしも登校を強制しないような措置が各地でとられるようになったことは、いままで当然のこととして考えられていた教育のあり方が、現実のレベルで相

対化されはじめたといえるのである。さらに1992年ごろをピークに18歳人口の減少が始まり、また少子化の傾向が今後一層強まり、教育環境全体に直接、間接にさまざまな影響を及ぼしてくるものと思われる。

こうした変化は、教育学科をとりまく状況にも現れはじめた。教育学科では、1980年代の中頃を境にして、心理学専修への進学を希望する学生が教育学専修を希望する学生を上回るようになってきた。これには、教育荒廃の深刻化にもかかわらず、学級定員の減少などの教育条件の充実が十分に行われず、教員採用者の数が全国的に絞られ始め、教員に就職することが年々困難になってきていることや、教育現場の荒廃が教員志望者を結果的に減少させている点など、さまざまな要因が考えられる。いずれにせよ、教育学科を支えてきたさまざまな要素が、次第に変化しつつあることにまちがいはなく、90年代はさらにそれが進行していったといえるだろう。さらに学生が就職活動を行う期間も次第に伸張し、4年次生での教育にさまざまな影響を及ぼすようになってきた。

文学部の他学科では、すでに専修分けを2年次の段階に引き下げている。教育学科でも1994年度から1部では、従来2年次生担当であった教育学概論、教育心理学概論を1年次担当とし、教育学・心理学基礎演習は廃止、3年次担当であった心理学一般実験を心理学専修の選択必修科目として2年次担当とし、それに対応する教育学専修の選択必修科目として教育学基礎研究を2年次に新設した。

また、1991年に文部省から出された大学設置基準の大綱化方針は、関西大学全体、就中、文学部のあり方やその将来に展望にさまざま波紋を投げかけることになった。

さらに1997年7月には、教育職員養成課程審議会が、中学校の実習期間の延長を含めた大幅な大学での教員養成課程の見直し案（中間答

申)を出し、1999年を目途に、教職課程カリキュラムの大幅な改編を迫られるという状況になっている。

大学全体としても、こうした状況のなかで1997年に全学的な将来構想計画委員会が設置され、2部の問題も含めて、さまざまな議論が始まっている。

このような内外ともあわただしい状況のなかで、教育学科は30周年の節目を迎えることに

なった。学科では、1997年11月20日に「教育学科創立30周年の集い」を関西大学教育学会、教育学科同窓会との共同主催で開催し、そのシンポジウムのなかで、最近の教育現場での急激な状況の変化についてのさまざまな報告を受けた。われわれは、これまでの30年の歩みと蓄積から学びながら、将来への的確な展望のもとで、教育学科の次の10年を実り豊のものとして築いていかなければならない。

教育学科在職教員一覧

氏名	在職期間
鈴木 祥 蔵	1950から1988
川口 勇	1951から1972
田中 正 枝 (旧姓、沢登)	1964から1973
宮沢 康 人	1967から1969
梅津 八 三 (故人)	1967から1970
田中 欣 和	1967から現在
右島 洋 介	1967から1994
藤井 稔 成	1967から現在
村尾 能 成	1968から現在
中島 巖 善	1968から現在
海老原 治 善	1969から1981
宗 孝 文	1969から1977
小川 正 一	1970から現在
山下 栄 一	1971から現在
粕谷 守 孝	1972から1986
西村 忠 泰	1973から1975
倉石 精 一 (故人)	1974から1975
住 宏 平 (故人)	1976から1984
竹内 良 知 (故人)	1977から1988
野村 幸 正	1977から現在
玉田 勝 郎	1978から現在
松村 暢 隆	1982から現在
岡村 達 雄	1983から現在
葉賀 弘 彦	1985から現在
本山 幸 彦	1988から1994
山本 冬 彦	1989から現在
田中 俊 也	1989から現在
尾崎 ムゲン	1994から現在
赤 尾 勝 己	1995から現在

教育学科学生数一覧

卒業年	(回)	1部	2部	計
1971	1	66	6	72
72	2	44	19	63
73	3	68	16	84
74	4	47	9	56
75	5	63	9	72
76	6	62	14	76
77	7	69	8	77
78	8	63	11	74
79	9	102	17	119
80	10	56	20	76
81	11	71	5	76
82	12	54	14	68
83	13	47	7	54
84	14	93	8	101
85	15	66	12	78
86	16	66	24	90
87	17	89	9	98
88	18	62	12	74
89	19	61	5	66
90	20	86	6	92
91	21	90	6	96
92	22	94	10	104
93	23	111	10	121
94	24	93	10	103
95	25	117	10	127
96	26	98	9	108
合計		1938	286	2224